

ナカジロシタバ幼虫に対する各種薬剤の効果

○上室 剛

鹿児島県農業開発総合センター 大隅支場

ナカジロシタバ *Aedia leucomelas* (Linnaeus) は、幼虫がサツマイモの葉を食害し発生が多くなると短期間のうちに葉脈や茎のみを残し食べ尽くすことから重要害虫のひとつである。本種に対する防除は若齢幼虫を対象にすることが基本で、栽培期間中における防除回数は2～3回となっている。しかし、本種の卵はほ場内で確認することは困難であるうえ、若齢幼虫の食害は小さいため発見が遅れがちになり、老齢幼虫になって食害が大きく進展した時点で発生に気づくことが少なくない。各種薬剤の本種幼虫に対する効果の知見は少なく、2～3齢幼虫に対して数種薬剤の効果の報告があるのみである(横須賀・大橋, 2008)。そこで、本種の老齢および若齢幼虫を対象に各種薬剤の効果を検討した。供試薬剤は有機リン、合成ピレスロイド、スピノシン、アベルメクチン、ベンゾイル尿素系 IGR、ジアシルヒドラジン系 IGR、ジアミドなど 10 系統、16 薬剤とし、検定はサツマイモ葉を用いた食餌浸漬法で行った結果、以下について明らかになった。

- 1) 老齢幼虫に対しては、大部分の薬剤が処理2日後までに全て死亡した。ジアシルヒドラジン系 IGR も3日後までに9割以上が死亡した。ベンゾイル尿素系 IGR は5日後までの死亡率が2割以下であり死亡しなかった個体は前蛹となった。
- 2) 若齢幼虫に対しては、大部分の薬剤が処理翌日までに全て死亡した。ベンゾイル尿素系 IGR も処理5日後までに全て死亡した。

これらの結果から、各種薬剤はナカジロシタバの幼虫の発育ステージを問わず現在のところ効果が高いと考えられる。今後も引き続き本種幼虫に対する各種薬剤の効果を注視する必要がある。

Effect of insecticides against the sweetpotato leaf worm.

Takeshi Kamimuro

Kagoshima Prefectural Institute for Agricultural Development, Osumi Branch